

ワ、フローレス、オーストラリア。

本種は *A. callichromus* Fairmaire と同一種で、この種名で用いられる場合の分布地は八重山諸島と台湾のみが記されているが、本来はきわめて広域に分布している。

既産地からみると採集した種はいずれも近隣の石垣島や西表島からも記録されているもので、この島固有の種はみられなかった。また台湾との共通種が多い。

末尾であるが、報告に当たり益本仁雄博士に同定いただいたことを明記して厚く御礼申し上げる。

引用文献

東 清二 (監修), 2002, 琉球列島産昆虫目録, 沖縄生物学会, 240-247.

Bremer, H. J. & K. Ando, 2009. A New Species of *Amarygmus* Dalman, 1823 from Japan (Coleoptera: Tenebrionidae: *Amarygmus*) Entomological Review of Japan, 64(1): 11-18.

(楠井善久 643-0004 有田郡湯浅町大字湯浅1043)

【短報】屋内で同所的に確認されたヒラタキクイムシとシロオビカッコウムシ

ヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* (Stephens, 1830) は、建材等に用いられるナラ、カシ、シオジ、キリ、タケ、ケヤキ、ラワンなどを加害する著名な乾材害虫の一種である (日本ペストコントロール協会, 1987)。一方、シロオビカッコウムシ *Tarsostenus univittatus* (Rossi, 1792) は、ヒラタキクイムシの捕

食性天敵として知られており、成虫幼虫ともにヒラタキクイムシを捕食するといわれる (黒澤ほか, 1985; 宮ノ下ほか, 2004)。しかし、両種が同時に発見される機会はまれであり、具体的なデータを伴った記録は宮ノ下ほか (2004) などの僅かな報告があるのみと思われる。

筆者は、屋内において同所的に得られた両種の記録を有するため、以下の通り報告して状況についても言及したい。同定については、ヒラタキクイムシは日本ペストコントロール協会 (1987)、黒澤ほか (1985) を併用し、シロオビカッコウムシは黒澤ほか (1985) を用いた。なお加害物件への配慮として、詳しい産地は伏せることとする。

記録

ヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* (Stephens, 1830) (図1): 13頭, 新潟県長岡市, 12-VII-2011, 深田純採集, 岩田泰幸保管。

シロオビカッコウムシ *Tarsostenus univittatus* (Rossi, 1792) (図2): 1頭, 新潟県長岡市, 12-VII-2011, 深田純採集, 岩田泰幸保管。

ヒラタキクイムシは、住宅1階脱衣場の床板外材 (ラワン) より多数の発生が見られ、材の表面には脱出孔 (直径2 mm 内外) を多数確認した (図3)。この物件は、2011年の時点で築4年目にあたり、ヒラタキクイムシ成虫の発生は2009年から毎年6~8月位の時期に確認されていた。2011年には大量の成虫発生が確認されたため、弊社へ調査依頼が舞い込んだ。仲介の工務店によれば、捕獲した個体は記録した13頭のみであるが、実際に目撃した発生個体はかなりの頭数に及んだとのことである。

シロオビカッコウムシは、捕獲されたヒラタキクイムシの検体に混じって持ちこまれ、両種は同所にて得られた。

現場より持ち帰られた加害痕のある木片 (11

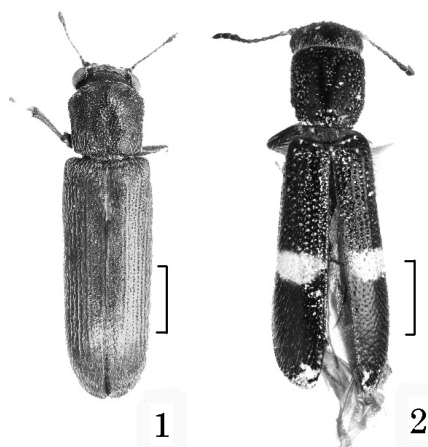


図1. ヒラタキクイムシの全形。図2. シロオビカッコウムシの全形。図1-2のスケールバーは、共に1.0 mm。

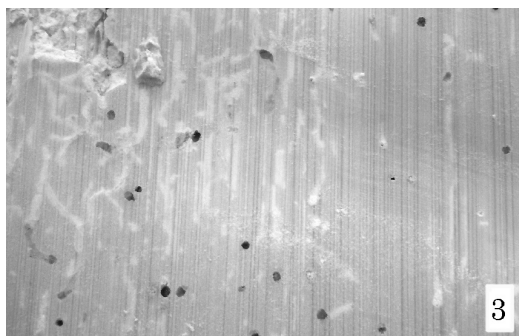


図3. ヒラタキクイムシの発生が見られたラワン材。

cm×11 cm) の内部を検したところ、羽脱前のヒラタキクイムシ成虫のみが得られ、シロオビカッコウムシは得られなかった。今回捕獲されたシロオビカッコウムシが、屋内で発生した個体か、屋外より飛来した個体かを判断することは出来なかった。

シロオビカッコウムシの成虫は、ヒラタキクイムシ成虫を捕食するといわれるが(宮ノ下ほか, 2004), 持ち込まれたヒラタキクイムシは一部の個体で脚部の欠損が見られたものの、攻撃を受けて虫体がバラバラになったような個体は見られなかった。

同定により両種名が明らかになったため、発生物件においては加害部材を交換する処置がとられた。今回とよく似た事例として、埼玉県の築3年から4年の家屋より、同所的に両種の得られた例が報告されている(宮ノ下ほか, 2004)。

今回、両種の発生が確認された長岡市は豪雪地帯にあたり、冬季は低温期が長期間続く。しかし近年では、ヒラタキクイムシやオオナガシクイ *Heterobostrychus hamatipennis* (Lesne, 1895) など、南方系乾材害虫の被害相談が弊社に寄せられる機会が増えてきている。これは加温された屋内において、南方系昆虫の越冬出来る機会が増えているた

めと推測される。また、冬季におけるヒラタキクイムシの発生例は以前から知られているが、近年では床暖房の普及による影響で更なる発生例の増加が懸念されており(大村, 2009), 物件の位置する地域や立地、また季節に関係なく、屋内で発生する害虫に対して神経を尖らせていく必要性が求められている。

末筆となるが、検体をご提供いただき、現場の状況をお聞かせいただいた深田 純氏(ニューロンサニター株式会社)と標本写真を撮影いただいた岩田朋文氏(愛媛大学)に御礼申しあげたい。

引用文献

- 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編, 1985. 日本原色甲虫図鑑Ⅲ. 500 pp. 保育社, 大阪.
- 宮ノ下明大・今村太郎・石島 力・日野 出, 2004. 家屋内におけるヒラタキクイムシとシロオビカッコウムシの発生および貯蔵食品害虫に対するシロオビカッコウムシ成虫の捕食実験. 家屋害虫, 26 (2): 123-127.
- 日本ペストコントロール協会, 1987. 原色ペストコントロール図説第Ⅱ集. 東京.
- 大村和香子, 2009. 乾材害虫および乾材シロアリに関する最近の知見. 家屋害虫, 31 (1), 19-26.

(岩田泰幸 940-1104 長岡市撰田屋町2633-3
ニューロンサニター(株)
laccotrephes_1874@yahoo.co.jp)



広渡俊哉 (編集)

「絵かき虫の生物学 (環境 Eco 選書)」

北隆館

2011年1月3日初版発行 236 pp.

「絵かき虫」とは潜葉性昆虫の別名であり、また愛称でもある。本書では、この絵かき虫を対象に、14名からなる研究者が最新の知見を紹介している。潜葉性はチョウ目、ハエ目、甲虫目、ハチ目の幼虫に知られており、そのなかで多数回起源している現象である。その習性は種によって大きく異なり、また幼虫の形態も変化に富んでいる。甲虫類では、沢田佳久によって甲虫類全般とチョッキリ類について紹介されているほか、加藤真によってソテツの若葉とタコノキに潜孔するコゲチャサビカミキリとタコノキハモグリゾウムシ *Phylloplatypus pandani* について触れられている。沢田の総論は非常によくまとまっており、甲虫における絵かき虫の進化や多様性がよくわかる。また専門のチョッキリについては独自の知見を交

えて詳しく解説しており、今後の研究の可能性を感じさせるものであった。もちろん、絵かき虫全体からすれば、甲虫は異端と言ってもよく、多様性のわずかな一角を占めるに過ぎない。本書に登場するハエ、ハチ、ガといった甲虫以外の絵かき虫の面白さにも驚かされることが多く、目から鱗の落ちる話題が少なくなかった。とくに若手の優秀な研究者として有名な川北 篤と大島一正によるホソガ類の研究は一虫好きとして非常に刺激的であった。甲虫の絵かき虫にもさまざまな研究課題が残されているが、このような甲虫以外の昆虫の最新の知見は、将来の研究への重要な示唆を与えてくれるはずである。潜葉性という習性の共通性でまとめられたこの一冊は、生き物の引き起こすある一つの現象を概観できる点で、すぐれた教科書であり、また全体に読みやすい文面は、多くの虫屋の好奇心をくすぐるものであろう。

(九州大学総合研究博物館 丸山宗利)